

## 1.たづな 馬事偶感



元 馬事文化財団専務理事 高橋 正彦

馬という動物に魅きつけられる心、さらには情念とはいかなるものであろうか。かつて人間の生活や労働、または武力の一端を担った仲間と言うだけの単純な理由からだけではなさそうである。もっと深いところで生きものとして人間と共振する部分がありそうである。思いつくままに馬事の周辺を散策してみよう。

大阪生まれのつむじまるともえ丸巴さんは出版社に勤めていたが北海道に移住して馬や動物たちと暮らしている。映画に登場する馬を追いかけて『馬映画 100 選』をじょうし上梓して、これが昨年度のJRA馬事文化賞を受賞した。

馬の写真家、内藤律子さんも同賞の90年度の受賞者だが、競馬場で見かけなくなったと思ったら浦河町民になっていた。馬に近い所に生活の拠点を置いて彼等の生命に迫ろうとしているのにちがいない。

わが国の馬の文化は残念ながらまだ根が浅い。近代の国づくりの富国強兵に馬を組み入れ、その文化的側面に関心の及ぶ余裕がなかったといえよう。だが遠くに歴史を振り返れば外国の馬から受けた文化的衝撃はさまざま記録されている。

天正19年うるう閏正月、聚楽第の豊臣秀吉にローマに派遣されていた少年使節(すでに成人していた)の4人がイエズス会の宣教師30余人とともに献上品を持ってしこう伺候するのだが、その先頭がアラビヤ馬だったという。西の洞院時慶など公卿の日記にその見事さが書かれている。イエズス会の宣教師ルイス・フロイスは『日欧文化比較論』に言う。

- 一、 われわれの馬はきわめて美しい。日本のものはそれに比べてはるかに劣る。
- 二、 われわれのは走っていてもびたりと止まる。日本のはそのようには慣らされていない。

など39項目にもわたって馬の体躯、習性、手入れや飼育法、調教、馬具、厩舎などひが彼我の比較を述べている。

『西説伯楽必携』という大冊がある。

これは八代将軍吉宗の享保10年に5頭の馬とともに来朝したハンス・ユンゲン・ケイゼルという馬術家からの聞き書きで、通詞今村市兵衛がまとめたものである。内容は西洋式馬

術、馬の飼育法、その疾病治療法など詳しく述べたもの。かの杉田玄白らによる『解体新書』の訳述出版(1774年)に先立ったこと半世紀ばかり前のことである。余談ながらケイゼルは多大な褒賞ほうしょう かしを下賜されて1735年に帰国の途につくのだが、その賜物の多さをねたまれたまものて船中で殺され、品々は全部盗られてしまう。後日ケイゼルの非命を知った吉宗は遺されのこた妻子に同じ品々を贈っている。

その後『西説伯樂必携』が実用に供された実績はつまびらかではない。『解体新書』がその後の学問と思想に与えた影響を思う時、馬を取り扱うことの社会的な底の浅さ狭さを思わざるをえない。将軍が音頭をとってさえもそれを支える畜産の層や技術が熟していなかったので、権力者の趣味の域を出られなかったのではないか。

近年、競馬が社会現象となるに及んで馬の文化にやっと目が向けられるようになった。そういう文化を支えるものは何であろう。競馬の普及や昔からの仲間、美しいなどなどの理由は人間との親和関係のほんの一部であろう。

戦時思想と抱き合わせで圧殺された古い言葉に「馬事思想」がある。軍国の思想を洗い落として虚心坦懐きょしんたんかいにこの四文字をながめていると、亡霊の復権とは全く別の、新しいエネルギーを内包した文化の骨太の基底のように思えてくる。「思想」という言葉が重いなら、冒頭に述べたJRA馬事文化賞を受賞した人達の胸の内に確固として脈打つ熱い不変のもの、あだばなと言いかえてもいい。馬の文化は人類史に咲いた徒花とはどうしても思えない。